

第48回学習会を、平成25年10月11日(金)19:00~20:00福岡市教育センターにて行いましたので報告いたします。

第48回の内容

講師 重枝一郎先生

インナールールを高めるために

- 1 インナールール向上のための「共有意識」
- 2 さまざまな行事活動をどう利用するか
- 3 ひとりひとりの生徒とのパイプを太くする
- 4 うまくいかない
- 5 演習「えんぴつ対談」「背中合わせ・向かい合わせ」「〇〇をよくする人」



インナールールを高めるために

1 インナールール向上のための「共有意識」

(1) 意味の共有・行動の共有・**感情の共有**

(2) 余波を利用する

感情は伝染する→感情の共有の余波を利用して、行動・意味の変容につなげる
(不安の緩和→やってみよう)

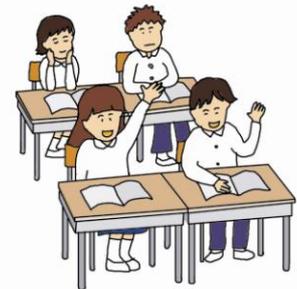
(3) 2学期は1学期の行動を振り返る
(再契約=行動の共有)

2 さまざまな行事活動をどう利用するか

(1) 学級の組織(役割)・ルールを再確認する

行動

- 行動が公平で不満感がない
- 行動が効率的で意味を感じる



(2) まとまることへの抵抗感を取り除く GWT の活用

感情

- 感情に伴って行動が誘発される
- プラスの感情で意味を深める

(3) 大きな行事での役割を遂行させ喜びを感じさせる

意味

- 意味付けでプラスの感情
- 意味付けで積極的に行動

3 ひとりひとりの生徒とのパイプを太くする

- (1) 参加的リーダーシップ
 - ・リーダー決め
 - ・生徒の振り返りを活用
- (2) 誰とでも組める力を促進・・・→ (3学期) 行動をほめ自分らしさに強く気付かせる
 - ・相談
 - ・励まし
 - ・視線
- (3) 以心伝心は苦手
 - ・小さなこだわりを契約

4 うまくいかない

〈実態〉

- ・敏感すぎる
- ・攻撃的
- ・向き合わない
- ・おざなり
- ・確かな抵抗



〈対応〉

- ・1学期に 最初のルール破りを見逃さない
ルールがあると不安がなくなる
トラブルは全体にかえず } をしておく
- ・イントロでの教師の自己開示：感情に働きかけ行動にスイッチを入れる
- ・最低限のルールを確認し、活動させる
身近なモデルを活用し、本格的にルールづくり
- ・日常的に小さな成功体験を逃さずシェアリング
- ・事前活動 ・ペアで活動から

〈日常〉 5つの意識でインナールールを高める

- ①相手意識 (3つの上手)
- ②ルール意識 (3つのルール)
- ③見る意識 (2本のアンテナ)
- ④共有意識 (3つの共有)
- ⑤間の意識 (2つの間)



インナールールとアウタールール

数年前までの学校では、教師が子どもに注意を繰り返せば、自動的にルールになっていました。ところが、今の時代はそうならないことが多いと思います。ベテランの先生ほど、子どもや保護者の変化に翻弄されることが多いと思います。それは、今までの教師としての常識や実践が、通用しなくなっているからです。教師の強制性に対する子どもの逸脱行為が出たとき、教師が、より強制性を強めていくと逆に大きな荒れにつながる場合があります。子どもの荒れの根っこは「インナールールの欠如」だと考えます。

信頼関係としつけ（ルール作り）は、集団体験を通して同時に育てます。まず、子どもには、ルールを守ると安心感が生まれることを感じさせます。これは、「感情」に働きかけることです。安心感が人間関係における信頼を育むことを、教師が語ります。これは、「意味」を知らせることで、ルールを守ることのよさを価値付けるのです。信頼関係が生まれると、子どもはさらに、ルールを守るようになります。これは、「行動」としてあらわれます。

つまり、教師はいつでも、子どもの「感情」と「意味」と「行動」を意識し、共有するのです。

「アウタールール」とは、集団生活の規律です。心の外の外的な世界にあるルールです。

「インナールール」とは、心の内の内的なルールで、信頼関係に大きく関わります。

「アウタールール」に対して、外的な世界から押しつけられた強制的なものだという感覚が強いと、人は逸脱、反発しようとし、ところが、感情を共有し、信頼関係が生まれると、同じ「ルール」を不快感のないものとして受容するようになります。これが、「インナールール」です。

今までの教師としての経験から考えると、まず「感情」に働きかけると、意味を理解し行動変容につながりやすいと思います。理屈だけでは動かない、感情に左右されるのが人間であり、感情は伝染するからです。

ノンバーバルコミュニケーション

子どもは、教師の言葉以上に、表情などの非言語の情報を感じ取っています。大人よりも感性が鋭い部分があるのかもしれませんが。教師がいくら、言葉では正しいことを言っている、表情が伴わなければ、子どもには届きません。子どもは直感的に、言葉ではなく表情で判断しているのです。

教師は、自分の表情がどのように受けとめられているのかを客観視できる力量が求められます。それが、教師のエンターテインメント性です。

授業をしている自分や、集会等で子どもに話している自分をビデオに撮って客観的に見ると、絶対に気が付きます。自分でカッコ悪いと思うことは、しなくなります。話している内容よりも、見た目や印象はどうなのか？子どもは惹き付けられているか？

勇気を出して自己点検すると、必ず成長できます。

行動変容を促すために

教師は、子どもと「意味」や「行動」を共有するために、まず「感情」を共有し、その余波でつながるようにします。「意味」や「行動」の共有は、子どもが反発しやすいのですが、まず、「感情」を共有し、インナールールが育まれると、行動変容につながりやすいようです。

教師がねらうのは、子ども自身が「やってみよう」と前向きになるような「感情共有」です。

例えば、掃除を例にすると、まわりがあまりまじめに掃除をしていないような状況では、自分だけがまじめに掃除をすることに抵抗感をもちます。「掃除をする意味」をいくら理解していても、子どもは、まわりに流されるのです。しかし、掃除をしてきれいになった気持ちよさを共有し、その「意味」を理解するようになると、少しずつ行動変容が見られます。行動した後に、「私ばかりさせられている・・・」と不満をもつような、感情がマイナスに働かないように、教師は気を付けるようにします。子どもには、公平感をもちさせることが大切です。

プラスの感情をもつと、行動が誘発されます。このクラスでは、どんどんプラスの行動をとってもいいのだと、子どもが理解するようになります。そして、その感情が伝染していくのです。

最初からクラス全員、例えば40人を相手にするのではなく、1人、2人と、インナールールが育まれると、それが伝染します。

また、「感情」「意味」「行動」のどこかにスイッチを入れると、他の2つに影響を与えます。まず、ひとつのスイッチを入れることが大切です。

状況に応じた教師のリーダーシップ

1学期の教師のリーダーシップは、教示的、説明的に行い、インナールールを育てます。

2学期の教師のリーダーシップは、参加的にします。

子どもの輪の中に教師も入り、参加しながら、最終決定は子どもにさせて花をもたせます。集団活動をしたら、必ず振り返りをするようにして、プラスメッセージを交流します。また、タイミングよく、子どもたちに考えさせる場面をつくります。このクラスの状態は、本当にこれでいいの？学級目標に近付いているの？成長できているの？教師が問いかけます。

さらに、「誰とでも組める力をつけてほしい」という教師の願いを話し、チャレンジさせます。子どもに期待し、要求するのです。このような取組が、3学期につながります。3学期は、個々の子どもたちに、自分らしさや自分のよさに、強く気付かせていきます。

小さなこだわりを契約

最近の子どもたちは、以心伝心が苦手になってきています。教師が注意を繰り返しても、それがなかなか定着しません。

それよりも、「先生は見ていてくれる」「うまくいなくても、チャレンジしている自分を見守ってくれている」と、子どもに感じさせインナールールを築く方が、ルールの定着が望めます。

インナールールを育むのと同時に、教師の小さなこだわりを、学級に浸透させていきます。子どもと契約を結ぶのです。

例えば、教室環境です。立ったら必ずイスを入れる。イスや机の底に、綿ゴミをつけない。棚の中のかばんの向きをそろえる。そのような教師のこだわりを、さりげなく伝えます。時には、強い刺激を入れます。

床にひざまずいて、綿ゴミを手で取る教師の姿を見せたり、後ろの棚がよく見えるように、教室の前の方に机を寄せさせて授業をしたり……。それぞれの先生の持ち味で、刺激を入れます。「アウタールール」を「インナールール」に高めていくのです。

「うまくいかない」・・・子どもの実態に合っているか？

エンカウターの授業をするときに、教師が気になる子どもの実態例として、敏感すぎる（声が大きい、授業中によくしゃべる）、攻撃的（文句を言う）、授業や教師に向き合わない（のってこない）、おざなり（盛り上がらない、書く活動がいい加減）などがあります。このような実態がある場合は、きちんと活動しているグループを身近なモデルとして活用したり（褒めて全体で共有する）、導入の段階で子どもの感情に働きかける話をし、前向きに参加する意欲を高めたりすることが必要でしょう。しかしながら、確かな抵抗のあるクラスでは、エンカウターはできません。担任として、1学期にどんなことをしているか・・・1年間の見通しをもって、何をしておくのか・・・エンカウターをする前段として、しておくことがあります。それが、インナールールを育む取組です。

例えば、何かクラスで問題が起きたときには、みんなの問題として考えさせていますか？

1学期には、最低限のルールが守れる状態をつくっておきます。そして、本格的なルール作りをしていくのです。それも、子どもの実態や学級の様子を活用して、行うのです。

日常的に小さな成功体験をシェアリング

とってつけたように、1時間だけエンカウターの授業をするよりも、日常的に小さな成功体験を積み重ねさせることの方が、有効だと思います。小さな成功体験を積み重ね、「ルールがあるから楽しかった」「ルールを守ったから感動した」という体験をクラスで共有します。感情にスイッチを入れます。

「成功体験」は、チャレンジの要素があることが重要です。たいして苦勞せずに来たことは、成功体験にはなりません。苦勞を伴うことで、他者への感謝が生まれます。誰かの「いいところさがし」につながっていきます。

また、事前活動として、「応援メッセージ」を書かせるのも有効です。行事の前やチャレンジの前に「応援メッセージ」をもらうことは、感情にスイッチを入れます。

「応援メッセージをもらってどんな気持ちですか？」「こんな風に信じてくれているのを知って、どう思いましたか？」関係性を高めると、その後のチャレンジの結果の質が高まります。

「成功の循環」についての語りを入れると、意味を理解します。「関係性の質」が高まると「思考の質」

が高まり、「行動の質」が高まり、「結果の質が高まる」という法則です。

中学3年生などの受験期には、受験は個人戦ではなく団体戦という意識をもたせます。そして、他者からのちょっとした励ましで、忍耐強さが継続されることを実感させます。他者からの勇気付けで、積極的になり、「合格」や「優勝」以上の満足感を得られることを教えます。「人は信頼する者からしか学ばない。先生とみんな、また、友だち同士の信頼関係は、日常の学びに大きく影響する」という、教師の語りを入れるのもいいと思います。

日常的にインナールールを高める

「朝の会」や「帰りの会」を活用して、日常的に子どもたちに意識させたいのが、「相手意識」です。これは、言い換えると、教師が意識することです。

相手意識では、3つの上手を意識させます。「あいさつ上手」「お礼上手」「うなずき上手」です。帰りの会などで、振り返りをさせると、意識が持続します。「ちょっとしたことだったけれど、〇〇さんにお礼を言われて気持ちがよかったです」「朝、イライラしていたけど、〇〇さんが明るくあいさつしてくれて、うなずきながら話を聴いてくれたので、うれしかったです」

このような交流をすると、友だち同士のインナールールが高まります。教師も、感動して子どもの話を聴くようにします。それが、教師と子どものインナールールを高めます。

「ルール意識」「見る意識」「共有意識」

「人とつきあうときのルール」「みんなと活動するときのルール」「集団生活のルール」3つのルールを、子どもに定着させるためには、教師が2本のアンテナを日常的にもち、子どもに伝えることです。2本のアンテナとは、「ルール遵守」と「ルール違反」を見逃さないアンテナです。

ルール遵守の子どもは見逃さずにはめて、クラスのモデルにします。小さなルール違反をした子どもも見逃さず、端的に注意します。毅然とした態度で、短く的確な注意をします。それが、クラスに安心感をもたらします。教師への信頼感にもなります。

学級崩壊は、一部のルール違反をする子どもが原因で起きるわけではありません。クラスの中で、まじめにルールを守っているような子どもたちが、担任を見捨てたときに起きるのです。教師がルール違反を見逃すことを、厳しい視線で見ている子どももいるのです。

このように、教師は2本のアンテナをもち、日常的に子どもの「感情」にスイッチを入れ、インナールールを高めます。

2つの間

一日の大半は授業なので、授業と日常的な取組を往復的に行うと、相乗効果があります。授業中にインナールールを高める取組も生徒指導もするのです。

子どもに知的な刺激を入れる場合は、教師に「待つ」姿勢が必要となります。子どもにじっくり考えさせる時間を確保するのです。

情的な刺激を入れるときは、つまり、感情に働きかける場合は、「すぐ」です。間髪入れずに、その場ですぐにほめます。そのタイミングを逃さないようにします。子どもの感情にプラスのスイッチを入れる場面は、学校生活の中でたくさんあります。意外に、先生たちは、それを流してしまい、アウトプットしていないのです。

学校は子どもにとって「生きる力」を育む場です。義務教育の中で学校に求められるのは、教科内容を教えるだけではなく、共生社会の担い手として生きる力を育むことです。



演習 「えんぴつ対談」

いわゆる「筆談」です。「えんぴつ対談」シートに話したいことを交互に書きます。ルールは、1人で長く書かないことです。テーマの設定によって、いろいろな場面で活用できます。

例えば、「体育祭を終えて」というテーマなら、「楽しかったね」「先輩の姿はさすがだったよね」「応援団の〇〇先輩の姿にあこがれるね」「私たちも先輩みたいになりたいね」等と、内容が焦点化されていきます。

夏休みの宿題についてなら、「1日1時間くらいは宿題をしないとね」「うん、わかった。がんばってみる」等と、素直に書くペアがいます。それを全体に紹介すると、クラスに心地よい空気が生まれます。

ペアを変えたり、テーマを変えたりして、日常的に少しの時間を見つけてできる内容です。

誰かの問いかけに対して、アサーティブになる反応を見つけて、その振り返りをねらってクラスのルールにしていきます。ほめて感情交流を促し、インナールールを高めます。

このように、教師が何をねらうのか？子どもにどんな語りをするのか？ここが勝負です。

子ども全員が100%できなくても、どこかにスイッチを入れたら、感情が伝染し、教室の空気になります。それをねらうのです。

ペアをどんどん入れ替えて、誰とでも組める力やまとまることへの抵抗感をなくします。

(※ワークシート例)

S	😊	S	😊	S	😊	自分を書き出す 印やマーク	😊	S	😊	テーマ(体育祭)	ペア名(重)	
もちろん！	送立ちの練習、つきあって	*	*	*	*	*	*	*	*	でも、あんなの、できるか	そうね、来年は、私たちの先輩たちの組体操、カッコ	
いっしょにが		*	*	*	*	*	*	*	*			

☆えんぴつ対談は、活動が進むにつれ、テーマが焦点化され、自分の内面を見つめることができる。

☆自己理解や他者理解の場となる。



演習 「背中合わせ向かい合わせ」

「誰とでも組める力」を育み、「クラスでまとまることへの抵抗感をなくす」活動として、「背中合わせ向かい合わせ」を紹介します。このような活動を通して、インナールールを育みます。活動することで、子ども心にストンとおちることがあるのです。

話をするときの位置関係が、情報の伝達にどのように影響するかを考えさせます。正確さや早さはもちろんですが、気持ちが違います。そこに気付かせます。

背中合わせだと、相手の様子が見えないので不安になり、伝える声が自然と大きくなります。その不安な気持ちを実感させます。

このような演習を行うときには、教師の意図的な働きかけが重要です。体験活動は、どのくらいの時間させるのか、どのタイミングでストップをかけるのか、どのような刺激を入れるのか、教師は何を語るのか……。子どもに体験させれば、子どもが自分で学ぶだろうという子ども任せのスタンスは、教師の放任です。効果的な教育活動を進めるうえで、教師による意図的なリーダーシップは欠かせません。ここが、教師の勝負です！

この活動を通して、人と良好なコミュニケーションをとるときの「ルールづくり」をしたり、「声の大きさ」をテーマに話し合わせたり、教師が学ばせたい内容によって、様々な教育活動を仕組むことができます。

このようにして、子どもたちの、人づきあいへの不安をほぐしていきます。ただし、このような活動を1回したからといって、すぐに、効果があらわれるようなことはありません。日常的な教育活動との相乗効果と積み重ねによって、すこしずつ育まれるのだということを、教師は肝に銘じておく必要があります。

演習 「〇〇をよくする人」

「〇〇をよくする人」は、行事などの機会に、子ども自身に考えさせることができます。例えば、「合唱コンクールをよくする人」は、どんな考え方をする人でしょうか？どんな目をしていますか？どんな聴き方をしますか？まず、個人で考えさせて、それを交流し、考えを広げ深め、学級全体でめざす姿を共有するのです。行事等の前に、望ましい行動や意味を考えさせておくのです。

「球技大会をよくする人」「学級をよくする人」「受験に合格する人」など、アレンジ可能です。

「受験に合格する人」について考えさせる場合は、「キラキラした目をしている人」というような、感覚的なことではなく、また、個人の努力というようなレベルではなく、「受験は団体戦」という意識がもてるように教師が導きます。友だちとの関係や教師との関係、学級の雰囲気や居心地の良さ、まわりからの励ましや応援の意味、それがどんな気持ちを生むのかなど、「意味」と「感情」に働きかけ、そのような「行動」を促すのです。

「学級をよくする担任」「授業をよくする先生」「学校をよくする先生」等にすれば、校内研修でも活用できます。

世の中をよくする人

名前 _____

どんな考えをする人ですか

手はどんなふうに使いますか

どんな目をしていますか

どんな聴き方をしますか

どんな言葉を使いますか

どんな心もちをしていますか

足はどんなふうにつかいますか



「実際の人」をさがしてみよう

その人の名前	どんな人か	実際の様子
〇〇さん	①やさしく明るいい心 ②役立つ手 ③積極的な足	毎朝、道の掃除をしてくれています。私が通ると笑顔であいさつをしてくれます。友達みたいになりました。

☆ほかにも自分なりに考えて記入してみよう。

本日のキーワード

- 日常的に小さな成功体験をシェアリング
- 日常的に5つの意識でインナールールを高める
- 感情を共有し、余波を利用する

♪ 学習会に参加された先生方の感想 ♪ (参加人数 20名)

- ・インナールールとアウトールールの相互バランスをとることの大切さを感じた。インナールール(信頼関係)を築くためには、感情に働きかけることが大切だと分かった。ぜひ、生徒の感情に働きかけたいと思います。
- ・自分の授業をビデオに撮って客観視するようにしないと、教師としてのスキルアップはないなと思いました。思い切って挑戦して、へこんでみたいと思います。
- ・えんぴつ対談、ぜひ参考にさせていただいて、クラスでも取り組んでみたいなと思います。1日のうち、少しの時間でもシーンとなる時間が作れたらと考えたので、ぜひ実践したいです。生徒会役員選挙に向けて、選ぶ側の姿勢を指導したかったのですが、今回教えていただいた、「世の中をよくする人」のプリントを使って、考えてみたいと思います。「〇〇中をよくする人」と題して、2学期の学活で取り組んでみたいと思います。毎回、納得することばかりです。また、前回の風土会でお話しされた、班づくりについて、もう少しくわしく教えていただけたらと思います。

(風土会に参加された先生方は、それぞれ自分にヒットした話やエクササイズに刺激を受け、チャレンジしてみようと前向きな気持ちで帰られます。きっと、風土会が各先生方の「感情」と「意味」に働きかけているのでしょう。その結果、先生方の「行動」に結びつくのだと思います。心地よい「感情」を抱き、その「意味」や「価値」に気付くと、人は自ら「行動」してみようとするのですね。それはきっと、子どもたちも同じなんだと思います。刺激を与えることって、大切です！)

- ・これからの教師は、「自分自身のエンターテインメント性」を客観視できるようになる必要があるという、最後に重枝先生が話された内容が印象的でした。自分自身をエンターテインメント性という視点で、見つめていきたいと思います。初任者の先生が、風土会に興味をもっているのですから、これから共に参加していきたいです。
- ・今日も1時間があっという間でした。子どもたちに対して、「即効性のある狭い指導」ではなく、子ども自身の内面に、インナールールを育むには、どうしたらいいのか？さらに、そのことを他の先生方(特に若い先生)に伝え、「ぜひ、取り組んでみよう！」と実践してもらうには、どう関わっていけばいいのか？日々、悩んでいるので、今日もたくさんの手がかりをいただきました。どうして風土会(重枝先生)に魅力があるのか・・・知的で熱いから！だったんだと、改めて感じました。私もまた、がんばります！来週から、VTRを撮ります！！若い先生のモチベーションを高めながら、協働して学級・学年づくりを行うために、取り組んでいきたいと思います。

(風土会の魅力は、知的で熱いのですね！ありがとうございます。)

平成19年11月2日に、第1回目の風土会を開催して以来、6年が経過しました。

第1回目は、何人の人が集まるのだろうか？10人くらい集まればいいね！と話したことを覚えています。

予想をはるかに超え、参加者は35人。駐車場の関係もあり、2回目からは、教育センターで開催することにしました。ちなみに、1回目は博多中学校で開催しました。

そして、この6年間に述べ1557人の先生方が参加されています。このように、多くの先生方の熱意とご支援に支えられていることに深く感謝しております。

風土会は、福岡市自主教育研究団体に認定されていますが、あえて会員制にはせずに、学びたい先生が学びたいときにいつでも参加できる、開かれた学習会にしております。

これからも、研鑽を積み、学校に貢献できる学習会にしていきたいですので、御参加よろしくお願いたします。)